THE CHILD OF THE FATE SLEPT.
SHE IS VERY TIRED.
SHE IS NOT HAPPY. IT IS HERE TO MAKE HER UNHAPPY.
HOWEVER, ONLY BEING SLEEPING IN IS VERY HAPPY.
THERE IS ONLY TO THE HAPPINESS TO SLEEP MORE.
HOWEVER, IT IS NEVER FULFILLED.

宿命の仔、眠る

Grand*Cross

AUTHOR:KAGAMI YAMATA

THE CHILD OF THE FATE SLEPT.
SHE IS VERY TIRED.
SHE IS NOT HAPPY. IT IS HERE TO MAKE HER UNHAPPY.
HOWEVER' ONLY BEING SLEEPING IN IS VERY HAPPY.
THERE IS ONLY TO THE HAPPINESS TO SLEEP MORE.
HOWEVER' IT IS NEVER FULFILLED.

宿命の仔、眠る

Grand ✝ Cross

AUTHOR:KAGAMI YAMATA
ILLUSTRATION:E-TARO

今も時々考えることがある。
特にこんな夜。
眠れそうにないままベッドにいると、
静かで静かで……まるでみんなみんないなくなってしまって……そう、みんな死んじゃったみたいな、
そんな事を考えちゃう夜。
そんな事絶対無いって思ってるけど、その考えすらこの濃い闇に溶けていくような。
こんな夜。
思う事はいつも同じ。
あの時のあれは、アラガミだったのかパパだったのか。
……それとも……別の誰かだったのかと。

○

目が覚めると、もう完全に日が高い時間帯で、私は少しだけしまったと思う。
昨日なかなか寝付けなかったせいだ。
今日は早く起きる予定だったのに。
そして今日こそは散らかってしまった部屋を少しでもいい、片付けるつもりだった。
せっかく、あんまり多くないお休みなのに……。
あんまり片付けが得意ではない自分を思い、思わずため息が漏れた。
(めんどくさい……なあ)
そのまま寝返りを打つと枕元に積んであった本に手が当たる。
「いった……」
丁度角に当たってしまった手首は思いもかけず結構痛く、まるで片付けをサボった自分への神様からの天罰のようだった。
しょうがない。
神様も怒っているみたいだし……やっぱり片付けはしないと。
私はジンジンと痛む手首を撫でながら、やっとの思いでベッドという素晴らしい楽園から抜け出したのだった。
ゴッドイーターとして東極支部にきてから早くてもう三ヶ月と九日目。
毎日はそれなりに忙しくて、それなりに充実していた。
ただ、それなりに忙しいという事は中々自分の時間が取れないわけで……私はなんとなく心の中で誰かに言い訳をしながら、脱ぎっぱなしになっていたスカートを拾い上げた。
「あっ……こんなところにあった!」
拾い上げたスカートの影から出てきたのは一冊の漫画本で、それは随分前に無くしてずっと探していたものだ。
「あーあ」
自分のだらしなさにうんざりする。
きっと何かの弾みで棚から落ちてしまったんだろう。
拾い上げたそれには汚れなんかはなかったけど、本をパンパンと払い棚に戻す。
こんな自分にがっかりする。
でもしょうがない。無事に見つかっただけでもよしとしなくては。
私は気を取り直して、また床に落ちていたシャツを拾った。
「ふう」
掃除が一段落したので時間を確認すると、とっくに日は落ちていて道理でお腹が空くわけだと納得する。
時間を忘れてひたすら掃除を進めたため、乱雑だった部屋は元の輝きを取り戻しつつあった。
これなら、次のお休みまで持つだろう。
私は一息いれるため、紅茶でも飲もうとポットに電源を入れた。
しばらくすると、シュンシュンという楽しげな音と一緒に注ぎ口から白い上気が登ってくる。
それをボーッと眺めつつ、ランプが保温に切り替わるのを待った。
どうしてと思う。
なんであの時あんな事をしたのか。
でも、あんな事になるなんて。
でも、この時代、いつ何が起きてもおかしくないのに、どうしてあの時……。
私は果たしてそんな簡単な想像もできない程の子供だっただろうか……。
どうして……。
カチンとポットから音がして私はハッと顔を上げた。いけない。昨日のあの感じがまだ残っていて、私を後悔の渦に叩き込んでいる。
早く抜けないと、仕事にも差し障るだろう。

自分の個人的な事情で周りに迷惑は掛けられない。
そして自分は死ぬわけにいかない。
パパやママの敵をとるまでは。
絶対に。

◆　◇　◆

次の日は気持ちの良い快晴で、コウタの言い方を借りれば「捕食日和」なのだそうだ。
私は神機を構えたまま、指定の位置でアラガミの出現を待った。
神機を持つ手に力を入れる。
遠くですっかり少なくなってしまった鳥の声が聞こえた。

どうしてあの時。
あの時これが無かったのか。
この神機があったらもしかしたら……。
そう、もしかしたら……。
もしかしたら……。
パパ……ママ……。
助けて……。
許して。
お願い、パパを、ママを……！
誰か……っ

「アリサ、危ない！」

サクヤさんの声で私はとっさに横に飛んだ。
危ない。
もう少しでアラガミの攻撃をまともに食らうところだった。

「油断しないの」

サクヤさんが私の横でライフルを構え、そのままレーザーでシユウの羽根を打ち抜いた。

「らしくないじゃん」

後ろからはコウタの声。

「すみません」

一言。
そして次の瞬間、私はシユウの脳天めがけてブレードを振り下ろしていた。

○

任務が終わってしまえばあとは帰るだけで、いつもと変わらない。
私はブレードを二、三回振るとそのまま何となしに歩いていた。

「最後の一撃、すごかったじゃん！」

コウタが回り込むように話しかけてきた。

「でもさ、なんかあったの？戦闘中にボーッとしてるなんてらしくないぜ」

このコウタという人物はお馬鹿っぽく見えて実は良く人を観察している。

「別に何も無いですよ」

うん、関係ないことだから。

「そう？　ストレスとか溜めちゃ駄目だぜー！」

人懐こい笑顔。
……私は今、どんなふうに笑えるんだろう。
あの時、あの時から……私は……どんなふうに変わったんだろう……。
……パパ、ママ……。
私は私のまま？
無力だった幼い私。
あの時から大きくならなければ、パパやママの敵は打てない。
だけど、両親から愛されていたあの時の私とはもう似ても似つかなくて……。
両親を食べてしまったアラガミという化物を今は私が食べている。
……これじゃあ……化物は私じゃない。
……私は化物……ばけもの……バケモノ……。
パパ、ママを食べたのはアラガミというバケモノ。
そのバケモノを食べているのは私。
私は、私は……。

『パパやママを殺したのはあなたよ』

幼い私が話しかける。

『……ちがうっ！　わたしじゃない！』
「そう？　あなたが殺したんだよ。二人を困らせた。それから見殺しにしたの」
『見殺しになんて……っ』
『あなたが殺したのよ。あなたがあんなことしなけれ

ば二人は死ななかった』
『……っ』
『あなたが二人を食べたの。ひとごろし。バケモノ。ひとごろし。バケモノ。ひとごろし。バケモノ。二人を返して！　パパとママを返して！　かえしてかえしてかえしてかえしてかえしてかえしてかえしてかえして……』
「いやあああああああああっっ」
――違う違うチガウ違うちがうちがうチガウ違うチガウ
「おいアリサ！？」
私は耐えきれずにその場にしゃがみこんだ。
「ちがう！　ちがうちがうちがう！！！！」
「アリサ、どうしたの？」
「いや！　来ないでっっ！　来ないでーーーー！」
ふらつく足でなんとか立ち上がり駆け出す。
違う！　ちがうの！
その瞬間、誰かが私の腕を引いた。
――バチン！！
頭の中がフラッシュをたいたように真っ白になる。
光に包まれて何も見えない。
……私？　どうしたの……？
光は尚も大きく私を包んでいく。
光はどんどん大きくなっていってもう何も考えられない。

『……チガウノ……パパ、ママ……』
そこで私の意識はプッツリと途絶えた。

○

「――なるほど。それで方法はあるのか？」
「はい。特別にプログラミングした復活プログラムを使おうと思います。あー、要は本人の生来持っている生にしがみつく、執着する力を……」
「……わかった。この報告書通りのやり方で構わない。だが、失敗は許されんぞ。新型のゴッドイーターを失う訳にはいかない」
「はい。お任せ下さい、支部長」

◆　◇　◆

……ここは、何処だろう。
私、どうしたんだっけ？
気絶していたのか、体がひどく重くまるで泥の中で動いているようだ。
「あ……いけない！　任務中だったんだっ！」
なんてことを。
よく覚えてないが、大方アラガミの攻撃を受けて気絶してしまったんだろう。
仲間の救援も間に合わなかったということか。
危険――これまで戦ってきた私の経験がそう語る。
リンクエイドが間に合わないほどの敵では、旧型神器使いでは太刀打ちができないだろう。
早く戦線に復帰しないと私以外の犠牲者が出る。
新型を授かっている私は、それを防ぐ役割がある。
早く……いかないと。
私はゆっくりと立ち上がった。その瞬間。
「……っっ！」
後ろから物凄い力で捉えられてしまう。
しまった！　回り込まれていたんだ！
「離しなさいよ！」
全身をよじってなんとか振り払おうとしたけど、アラガミの腕と思しものは私を放さなかった。
ヌルヌルしている腕……触手が気持ち悪い。
このアラガミ、こんな攻撃で何を……そう思った途端、アラガミの触手が私の体にまとわりついた。
「きゃっ！　な、何っっ！？」
ぬるんっとその触手が私の服の中をまさぐる。
「いやっ！」
ぺちゃっとした粘液の感触と鼻に付く生臭い匂い。
それが何本も私の体を我物顔でまさぐり始めていた。
「あ……う……」
カランと音を立てて私の神機が腕から滑り落ちる。
腕は触手に絡め取られてしまい、私は抵抗らしい抵抗もできないまま、バンザイをする格好で数えきれないほどの触手に弄ばれていた。

「ひうっ！」

触手の一つが私のブラジャーを外し、乳首を強く捻った。

「やめてぇっ！」

触手はリズミカルに私の乳首をこね回す。

触手の先を二股にし、乳首を挟み込んで私を責め続けた。

だ、だめ……。ちから、入らなくなっちゃうっ！

「きゃああっっ！　やめてぇーーーー！」

触手の先がクワッと開いたかと思うとそのまま私の乳首を吸い上げた。

だめっ！こんなのだめぇーーーー！

「あああんっっ！そんな事しちゃだめぇ！」

私のオッパイからはちゅうちゅうと触手が乳首を吸い上げる音が聞こえてくる。

体が熱い。胸からこみ上げてくる初めての感覚に全身が硬くなる。

――にちゃ……

その時、太ももに触手のおぞましさを感じた。

見ると私のスカートは沢山の触手にまくりあげられ、私の下着をずり下げている。

「いや……んぐうっっっ！」

叫んだ私の口にも触手が入る。

途端に生臭い匂いが口いっぱいに広がった。

触手は私の歯列を舐め上げ、こじ開けて舌を絡めとっていった。

「っ！」

そしてついに触手が私の股間に直接触れた。

「んんんっっ！ん――ん――！」

やめて！　――必死に叫ぶその声も触手が吸い取ってしまう。

お願い！やめて！やめて！

触手はお構いなしに私の陰部を広げ、我が物顔でまさぐっていく。

「んぐっっ！ぐうううううっ――――！」

必死で叫んだせいで呼吸が苦しい。

頭がくらくらする……っ！

もうダメっ！き、気絶しちゃうっ……！

そう思った瞬間、

――どぶっっ！ぴゅるるるっ！

「うぐぐぐぐ――――！」

口に入っていた触手が粘液を吹き出した。

口の中いっぱいに広がる粘液に生臭さに、思わず涙が零れた。

き、きもちわるいよぉっ！

触手は尚も口内で暴れまわる。

――グチュ……グチュ……。

粘液は私の口の中で泡立てられ、口中に広まっていく。

「むぐっ……ぐうううううっっ……」

そして、口中にその粘液が染み渡る頃、私は体に違和感を覚え始めていた。

口だけじゃない。

触手が這い回っているところ、その全てが熱い。ズリ、ズリと這い回る度、そこからジンジンとしたかゆみにも似た感覚が広まっていく。

（なによこれっ！　痒くて、熱くなって……へ、変っ！　体が変になるッ！）

――ずちゅうううっっ！

（アソコ……撫でられてる……誰にも……見せた事ない場所……）

必死に股間の感触に耐えていると、満足したのか口内の触手は私から離れて行った。

だけど、ホッとできたのはその瞬間だけだった。

「きゃうっっ！」

触手が私の処……さっきからジンジンしている……その、おしっこが出る場所の上の処を擦った。

そこからビーン、ビーンと電気を流されたようなたまらない感覚が体を突き抜けた。

「やぁっっ！だ、だめっ！」

体がガクガクと揺れる。た、耐えられないっっ！

「んーーーーーーーーー！」

触手はなおも敏感な処をしごいていく。

やめてぇ……もうやめてよぉ……。

「あああぁっっ！　なんか、なんかっっ！　ううう――――！　くるよぉ――――！　あああああっ！」

何回目かの触手のシゴキで私の体は跳ね上がった。経験したことない快楽が体中をかけめぐって、私は全身を硬直させてそれに耐える。

「だめえ――――！　き、気持ちいいよぉっっ！」

思わず、口を付いた言葉に愕然とた。

……私なの？　コレが？　アラガミに体をいいようにされて……辱めを受けて……何て言った？

私？

「いや――――――っ！」

思わず叫んだその時――

「うぐうううううううっっ――――――！」

――とりわけ太かった触手が私のアソコをこじ開けてきた。

「痛い――――――っっ！」

メリ……メリと聞こえるはずも無いのに、私は自分のアソコの筋肉が、貼り合わされていたものが無理やり剥がされていく……そんな音を聞いたような気がしていた。

――メリ……メリ……

アラガミは更に侵入してくる。

「やめてぇ……んーーーーーーーーー！」

別の触手が私の乳首をひねり出した。

それと同時にまた股間の触手が私の突起を撫でさする。

「くあああんっっ！　だめっっ」

体から一瞬だけ力が抜ける。

アソコのアラガミはそれを見逃さなかった。

――ぐじゅうううううっっ

「あ――――――――！　あ――――――――！」

アラガミの触手は力の抜けた私を一気に貫く。

凄い質量と、凄い熱さ。私のアソコが燃えてるみたいっっ！

「あ――――――！　んんんんっっ！」

じゅっぷじゅっぷと私のアソコで触手が動いた。

私の膣壁をこすり、更に奥を目指している。

「んあああああっっ――――！！あんっっ！あんっ！」

私は私が信じられなかった。

あ、ア……気持いいよう……。気持ちいぃいイイいい――――っっっ！

「あんっっ！　んにゃあああああっっ――――！」

体中に快楽が渦巻く。

き、きもちいい……。

「あっっ！」

もう抵抗しないと判断したのか、横で私の足を抑えつけてきた触手離れ、私のお尻の方をさわってきた。

「んんんっっ」

自分以外の何かにお尻の穴をなでられるという初めての感覚に鳥肌が立つ。

だめ……やめて。そんなところだめ。

「きゃあああっっ！」

肛門に触れていた触手が先っぽから粘液を吹き出した。そしてそれを私の肛門に応げていく。

――にちゃ……にちゃ……。

おぞましい感覚に一層鳥肌が立った。

やめて……まさか……そこにも……？？

「ぐうううううううっっ――――！」

私の嫌な予感はそのまま的中した。

アラガミの触手は私の肛門をいとも簡単に押し広げ直腸に入ってきた。
肛門括約筋が押し広げられる痛みに目の前がスパークする。
「いた……いだ……い……う……」
だんだんと声もかすれてきてしまう。
もう駄目だと、意識が遠のきかけた瞬間
――どぶっっ……
「う……あ……」
肛門を犯していた触手のその先っぽから液体が出てきた。
その液体は私の直腸に見る間に広がっていき、触手と私の中の滑りをスムーズにしていく。
「あ……んっっ！」
グッグッと動かれると声が漏れる
それは痛みの声じゃない、自分でもわかる。
「あああっっ！んんっっ――――！」
全身に快感が駆け巡る。
アソコからお尻から……焼けるような熱さと一緒に電気を流されたような快楽が私を焼いていく。
「にゃあぁぁあん……んにゃぁ……」
私の口から驚くほど甘い嬌声が漏れていく……。
きもちいいの……私？
嘘ッッ！　こんなのウソだよおっっ！
アラガミが……アラガミに……私っっ！犯されているのにっっ！
パパやママを食べちゃったアラガミ。
私の目の前で。
憎い、憎い私の敵。
許さない、許さない。
私がコロスの。全てのこの地上のアラガミを。
全部、全部、全部！
（憎いのは、パパやママを見殺しにしちゃった自分でしょ？）
「……っ！」
ふいに私の頭の中で声が聞こえてきた。
幼い、私の声。
殺したのはアラガミじゃない、自分でしょと。
あの時から何度も何度も聞いた声。私の声。
「やめてよおおおおおおおっっ！」
私は絶叫する。
死にたくない！　こんなところで終わる訳には行かない！
アラガミを！　食い尽くすまではっ！
そう思った瞬間アラガミの触手は私の最奥を貫いてきた。体中に快感が駆け巡り、息が止まる。
「いやあ――――！　気持ちよくないっっ！　んにゃあああっっ――――！」
私はアラガミの触手に体中を舐られ、責められ、そして……意識を失った。

◆　◇　◆

気がつくとそこはどこかの部屋でで私は診察台のような物の上で足を広げていた。
（ここはどこだろう……？？　アレは……夢だったのかな……。私は、アレからどうしたんだろう……。こうして居るって事はまだ死んでないみたいだけど……）
体が熱く、思うように動かない。
そして広げられた股間からはまださっきのアラガミの触手が入っているような、そんな感じがした。
腕を動かすと何かついてることに気がついた。
視線を上にあげていくとそれは黄色い液体の点滴で、その隅にはフェンリルのマークがあった。
良かった。誰かが助けてくれたんだ……。
ほっと胸をなでおろしていると、白い扉が開き、白衣に身を包んだ男が入ってきた。
「気分はどうだ？」
「う……あ……」
思うように言葉がでない。私の言葉は舌が縺れてしまうような感じでうまく紡ぐ事が出なかった。
「わ……た……し……どうし……？」
やっとの思いでそこまで喋ると、医師らしきその男は書類に何かを書き込んでから私と視線を合わせ

た。

「あ……らがみ……」

「アリサ、君はアラガミの精液を体に受けてしまった、覚えているか？」

ああ……やっぱり夢じゃなかったんだ……。

私はコクリと頷いた。

「そのままにしておけばヴァギナから入り込んだ精液は君の体中を食い荒らすだろう」

医師は淡々と続ける。

「君はその精液を体の外に出すための適切な処置を受けなければならない」

「しょ……ち？」

「ああ。治療にはつらい事も多いとは思うが、そのままにしておけば君自身がアラガミとなってしまう。そうなる前に手を尽くし、液体を洗い流す必要がある。まずは中を確認しよう。力を抜いてなさい」

先生は傍らのワゴンから歯磨き粉もようなチューブを手に取り、その中身を私のアソコにすりつけていった。ひんやりとしたジェルを塗られる度に触手の記憶が頭に蘇る。

「う……」

一通り塗りつけるとチューブを置き、その横の銀色に光る鳥の嘴のような器具を手にとった。

「クスコで膣の状態を確認する。広げるから力を抜きなさい」

鈍く光るそれが私のアソコに押し付けられた時、私の体中に電流が走ったように体がビクンッと震えた。アソコから自分の愛液……か流れてるのがわかる。な、なんで……？？

「これじゃあ、ローションなんていらなかったかな？

アラガミは淫乱素質のある人間しか犯さないっていうけど……案外迷信なんかじゃないかもな……」

「うぅ……」

「入れるぞ」

「くううううっっ！」

だめえ！　だめっっ！　き、気持ちよくなるっっ！　こ、これは、処置、治療なんだから……。

こ、こうしなきゃ……治らないんだからっっ！

憎い憎い……アラガミになっちゃうんだからっっ！　気持ちよくなんかなっちゃだめっっ！

「くううんんっっ！」

「随分とひどく犯されたな」

先生が私の奥……広げられた子宮口を撫でた。

「んんんーーーーーー！　だ、だめぇーーーー！」

ビクンビクンと診察台の上で体が跳ね上がる。

撫でちゃダメッッ！お、おかしくなるっっ！

「くううううううっっ」

だめっっ！　だめっっ！

「あーーーーーー！　あああああっっーーーー！」

「……ここもアラガミに食われ始めているな……力を抜いてろ」

「あうっっ！　ぐっっ……ぐうううううっっ！」

子宮口を撫でていた先生の指はそのまま私の子宮に押し込まれた。

経験した事ない程の恐ろしい痛みに涙が流れる。

「いたいーーーーー！　いたいよぉっっーーーー！」

あまりの痛みで足が勝手に跳ね上がった。

私の足を拘束しているベルトがギチギチと音を立てる。

しかし先生の指は止まることはない。

ぐいぐいと強引に私の子宮を検査していく。

「痛いか？」

コクコクと首だけで頷く。

痛みがひどく声を出すのも辛かった。

先生は素知らぬ顔でそのまま片手で書類に何か書き込んでいく。

そしておもむろに指を引き抜いた。

「くうぅ……」

「アリサ、次は肛門を検査する」

「は、はい……」

呼吸を整える間もなく、私の肛門にはさっきのジェルが塗られていった。

アラガミのあの触手の事を思い出して、私は身を

更に固くした。
「力を抜いてろと言ったろう」
「はいぃ……ううう……」
先生の指が私の肛門に入ってくる。
力が入った私の足の指先はぎゅうっと丸くなった。
（……うう……気持ち悪いよぉ……）
クニクニと先生の指が中を擦っていく。
その度になんともい言えない気持ち悪さがゾクゾクと駆け回る。
「うあっ！」
急に指を抜かれ思わず声が上がる。
肛門はジンジンとしびれたまま、まだ少し口を開いているかのように感じられた。
「肛門鏡を入れる。そのまま力を抜いておけ」
「は、はい……」
先生が手に取った器具を見てしまい、後悔した。
あれを……入れられる……。
「くっ……」
冷たい金属が入ってくる。
指とはぜんぜん違うその無機質な塊が私の肛門を貫いた。
「うう……」
カチリと音がして肛門鏡が開かれたまま私の肛門の中、直腸を晒し出した。
（早く終わって欲しい……）
だだそれだけを願って懸命に呼吸を整える。
それになんだかさっきから体が熱くで何か体の奥がむずむずと落ち着かない感じがしている。
私の体はどうしてしまったんだろう……。
……このままだとアラガミになってしまうというのは本当なんだろうか？
……そんな事は聞いたことがない。
そもそも、アラガミが人間を犯すなんて聞いたことが無い……新種なのかな……。
でも、もしそうなってしまったら……パパやママを食べてしまったアラガミに自分がなってしまうとしたら……。
「う……く……」
私の頬に涙がつたった。
耐えられない。自分がアラガミになるなんて、耐えられない。
パパとママを食べたあのバケモノ。
アラガミに……私が……なる？
『もう……たは……じゃ……い』
遠くでまた声が聞こえた。
幼い私は遠くで叫んでいて、私のところまでは聞こえない。
「え……？」
聞き返すと幼い私は私が自分に気づいたのが嬉しいのか、手をふり、飛び跳ねて私に向かって叫ぶ。
『もう……な……はアラ……ミ……ない！』
「なんて言ってるのかわからない！」
私が郷を煮やして叫び返したその時。
いきなり目の前に幼い私が現れて叫んだ。
満面の笑顔で。
『もうあなたはアラガミじゃない！』
「……っ！　ちがっ……！」
『何が違うのこのバケモノ！　パパとママを返して！』
「違うッッ！　私はアラガミなんかじゃっ」
『うるさいバケモノ！　パパとママを返して！　かえせ！　かえせ！　返して！　かえして！』
「やめて！」
『かえせかえせかえせかえせかえせかえせかえせかえせ……』
いつの間にか私は周りをぐるっと囲まれて、その中にいた。
囲っている少女は……全部……私だった。
私が一斉に私を責める。
パパとママを返せ。
そして私はアラガミだと。
「やめてーーーーーー！」
泣き叫ぶ。もう許して。

違うの違うのっっ！
二人を殺そうなんて思ってない。
殺すつもりなんてこれっぽっちもなかったの！
『……憎いアラガミに犯されたくせに』
「っ……」
『憎いアラガミに犯されてよがったくせに』
「うぅ……」
『にくいアラガミに射精させてイッたくせに』
『憎いアラガミに今度はあなたがなるんでしょう』
「――アリサ！　起きなさい、アリサ」

頬を軽く叩かれて気がついた。
ここは……。
「だいぶやられているな。アリサ、よく聞くんだ。君の内部はアラガミの精液によってアラガミになりつつある」
「ひっ……い、いやぁ……アラガミはいや……！」
「落ち着きなさい。これを治療する方法は一つ。人の精液での洗浄しか無い」
「せい……えき？」
「人間の精液でアラガミの精液を洗い流せば君は助かる……とびきり新鮮な精液でね」

私は一も二もなく頷いた。
「精液……せいえきで私の……沢山洗ってください……い、今すぐ！」
連れてこられたところはフェンリルの奥の地下室だった。
私は先生に連れられ、扉をくぐった。

何も、特に何もないガランとした部屋だった。
「さあ、頑張りなさい」
先生が扉を閉めるとドアの向こうからカチリと小さく施錠する音が聞こえた。
アラガミになるなんて絶対嫌だから……こんな事なんでもないと思ってきたけど……なんだか大変な選択をしてしまった気がする。
（……でもしょうがない。これしか方法がないんだし……。……でも、やっぱり怖い……）

戦うことしか考えてこなかった私。
パパとママの敵討ちしか考えてなかった私。
でも、その私がいきなり男の人を受け入れろ、というのは厳しいものを感じる。
精液を受け入れろ、ということはセックスしろってことだ。
知識では知っていても体は知らない。
不安だらけの状態で、私はここに立っていた。
（もっとレクチャーしてくれてもいいじゃないですが……）

先生に少し不信を抱く。
だが事態は一刻を争うのだ。
私の体がアラガミ化したら、私はパパとママの仇を討てない。
私の思考は、ガチャリと音がして、私が入ってきた時とは反対にある扉が開いたところで終わった。
はっとして顔をあげるとたくさんの男達が私を見ていた。

「へぇ……なかなかかわいいじゃん」
値踏みするような男達の視線が絡み付いてくる。
……この男達に……洗ってもらうんだ……。
「アリサちゃん、アラガミにレイプされちゃってせーえきバンバン出されちゃったんでしょー？
「そのままにしておいたらアラガミになっちゃうからねー。オニーサン達がキレイキレイしてあげるからねー」
「おい、オニーサンってトシかよ、図々しいな！」
ギャハハ……。
男達の下品な笑い声が地下室に響く。
私、こんな人達に洗われちゃうの……？
「私は下品なのは嫌いです！　言葉を改めて下さい！」
キッパリそう言い切ると地下室はシン……と静寂に包まれた。しかし、それはたった一瞬の出来事だった。
「ぎゃはははっ！　おい、アリサちゃんとやら、君、自分の立場わかってるわけ？」
「お前は俺らにおまんこしてもらわないとアラガミになるんだぜ？　せーえきバンバンに射精してもらわないとダメなんだぞ？」
「くっ……こ、こんな下品な人達なんて嫌です！　変えてもらいます！」
「下品だなんてご挨拶だなあ……。でも無理！　お前は俺達に洗われるしかないの。……これ、なんだか

わかるか？」

男が指さした物は私の腕についてる腕輪だった。そこには赤く点灯した、今まで見たことの無いランプがついている。

「これは、お前の中のアラガミ濃度が示すランプだ。俺たちによーく洗われて、お前の中のアラガミ濃度が薄くなれば消える仕組みだ。これが真っ赤のうちはお前は半分アラガミってこった」

「私の中のアラガミ……？」

「そうだ。アリサちゃんはアラガミになっちゃってもいいのかなー？」

「ひ……っ」

（あなた自身がアラガミでパパとママを……）

聞こえてくるあの声。

幼い私の声。

いやっ！　やめて！　やめてーーーーー！

「嫌っ！お願い……っ！おねがいっ！私はアラガミになりたくないっっ」

私は必死に男達にすがった。

もうこれしか無いんだ。

どんな目に合ったって、私自身がアラガミになるよりましだ。

パパとママを食べちゃったアラガミなんかになりたくない！　私が強くなって！　もっともっと強くなってアラガミを食べて！　パパとママの敵を打って私が生き残るの！

「アリサたん。お願いする時はなんていうのかな？」

「お、お願いします……」

「何を？」

「私の……アソコを……」

「もっと大きい声で言えよ！　それからここはオマンコ！　だろ！？」

「ひぃっ！おまんこ……おまん……こ。あ、アリサのっ……オマンコ……みなさんで洗って下さい……。みなさんの精液で……アリサのおまんこの中のアラガミを洗い流してくださいっっ」

「よく言えましたーー」

「きゃあっっ！……きゃあんっ！」

いきなり胸を強く揉まれ、はだけた乳首が銜えられた。私の左胸は男の手のひらでまるでパン生地のように揉まれていく。そして右胸には男の歯が、私の乳首をコリコリとしごいていた。

「んんっっ！　あはっ……んっ！　ああん……」

「かわいいねぇ……こんなに喘いじゃって。どれ、こっちも……」

「ううううっっ！　あんっっ！　そこはっっ……きゃんっ」

クリトリスを急に摘まれ、体中に電流が走った。摘まれた場所から脳天に向かってビーンビーンと快楽信号が走る。

「ビリビリする……よぅ……あんっっ！っ、強く摘まないで……っ」

「へへっ。クリちゃんがチンポみたいに勃起してるぜぇ……フェラしてやるよ」

「きゃ……！」

男達は私の体を、そのまま床に押し倒した。

仰向けになった私を男達が取り囲む。

どの男も目を怪しいまでに鋭くさせて、獲物を狩り、いたぶり、捕食する、そんな雰囲気が辺りに濃厚な霧のように充満している。

それは、ゴッドイーターが勝利を確信し、捕食体制に入るそれの雰囲気と酷似していた。

「アリサたんのチンポクリいただきまーす。あむぅ」

「きゃうううぅぅうーーー！」

「んー、美味しいでちゅねー」

――んちゅ、じゅぶ、じゅじゅじゅ……！

下品な音を立てて股間の男は私のクリトリスを舐る。同時に乳首に別の男が吸い付く。

逃げ場の無い快楽に、私はただ震えて耐えるしかなかった。

「きゃうううっっ！　……キャンっっ！」

「キャンッて、わんこみてぇ」

「ホラホラわんちゃん、気落ちいいでちゅかー」

「ひんっっ！くうううぅ……っっ！」

「おまんこも可愛がってやるよ！」

「……っ！」

――じゅぷっっ！

私のおまんこに男の太い指が入ってくる。

「いたっ！　……ぃ……っ」

「おー……アリサの中あったけー。指にくいくい絡み付いてくる……」

「……半分アラガミ化してるからじゃねえ？」
「ぎゃははっっ！　アラガミ化ねぇ……！」

下品な声で男達が騒ぐ。
アラガミ化……そうだ。
私、アラガミになりつつあるんだ……。
……嫌だ！　絶対に！
そんなの死んでも耐えられない！
……それに比べたら、それに比べたら！
こんな男達に犯されるのは大した問題じゃない。
私は生きて、アラガミを捕食して、パパとママを、アラガミに食べられちゃった、パパとママを！

『……アリサ……アリサ……』

遠くから声が聞こえる。
この声。懐かしい、耳によく馴染む柔らかいバリトン。
……パパ？

『アリサ……』
「ぱぱ……？」

光に包まれていて顔こそ見れないけど……この声は間違いなくパパだ！
パパ！　パパ！
私に……私に会いに来てくれたの……？

「パパ！」
『アリサ』

光は相変わらず邪魔をして私からはパパの顔は見れない。
でも、そんな事はすぐにどうでもよくなった。
パパが……パパにまた会えた！

「パパッ！何処に行っていたの？……うっ……」

思わず涙が溢れる。
涙は私の足元になん粒もなん粒も落ちた。

「……アリサ、一人ぼっちでとても寂しかったのよ」
『アリサ……私は……今も……』
「……っ！」
『でも大丈夫。アリサが助けてくれるからね』
「パパ……？」
『パパは信じてるよ……私の可愛いアリサはアラガミなんかには負けないって』
「待って！　パパ！　行かないで！　パパ？　パパ！」

光はゆっくりと離れ同時にパパの姿も消えていく。
嫌だ！　嫌だ！　もう一人ぼっちは嫌なの！
パパ！　ママ！
お願い！　もうアリサを一人にしないでっ！

「パパぁ……ママぁ……」
「おい大丈夫か？　ボーッとしてっぞ？」
「報告書にあったフラッシュバックだろ、気にするなとあったが……なんか子供犯してるみたいだな」「オメーはそれが良くて立候補したんだろー」
「違いねぇ！」

パパ……私、負けない。
必ずパパ達をを助けにいくから……。

――バチン！

私の頭でまた何かが弾けた。
同時に体の中から湧き上がるものを感じる。
あれだ。アラガミに犯された時とおんなじ感じ。

「あ――――――――！　イクッッ！」

突然、本当に突然私はイッた。
体がブルブルと震え、何回も何回も自ら腰を振り上げてしまう。
それはとてもいやらしく、とても嫌悪すべきものだった。
だけれど、体の感じる快楽は私の生理的な嫌悪を押しつぶし、押し流し、電気を浴びるようにびりびりとした感触だけで満たしていく。

「お――――！　いきなりイキやがった！」
「あ――――！　あ――――！」
「こら、暴れるなよ！」
「あぐうううううううっっ！」

パパっっ！　パパぁ……！

「ひぅっっ！　もう……っ」
「どうした？　いきなり積極的になって？」
「もう……嫌なの……アラガミを……入れておきたくないよう……くぅ……！」
「……じゃあ、お願いしないとな。なんて言うんだ？」
「お願いしますぅ……わ、私の……」
「何だ？」
「ひぅっっ！　やあぁっっ……クリクリしないでぇ

……っっ！　腰はねちゃ……ダメっ！」
「ほれほれ！」
「お願いしますう！　アリサの……オマンコに！　皆さんのペニスを入れて……！　沢山精液出してくださ……ぐっっ！　うううううううっっ！」
「ほれ！　お待ちかねのおチンポだぞ！」
「痛ぃ……いた……！　くうううっっ！」

一気に男の物を最奥まで入れられ、呼吸ができなくなる。

「あー……血ぃでてんなぁ……ま、コレで滑りもよくなるか」
「いたいーーー！　痛いぃ！」
「すぐ良くなるって！」

入ってきた男はお構いなしに私の中を蹂躙していく。グチュ……グチュという音と共に何度も何度も抽送が繰り返される。

「うっっっ！　うううっっ！」
「アリサちゃーん、コレに耐えてせーえきいっぱい出してもらってアラガミ洗い流すんでしょー？」
「そうそう！　頑張らなきゃな！」
「……ぐっ！　……うあっっ！　は、はいぃ……」
「よし、イイコだ」

――イイコ。
その言葉に私の体は反応する。
『アリサはイイコだね』――パパは何度もそう言ってくれてた。
――アリサはイイコだね。

「くうううううんっっ！　あん！　パパああ……！　アリサ、イイコだよおっっ！　あああああーーー！」
「うんうん、イイコだ。じゃあ、そんなイイコのアリサちゃんはそろそろこっちも洗わないとな！」
「きゅうっ！？」

いきなり肛門を撫でられ鳥肌が立つ。
ああ……そこも……洗ってもらわなくちゃ……。

「おいおい待てよ！まさか、ハメたまま浣腸する気かよ？」
「いーじゃん、その方が刺激があって。大丈夫、今日使うのはちーさいイチジク浣腸だからさぁ」
「かー！　この好きもんが！」
「女は結構我慢できるもんだよ。俺の研究結果」
「わかったよ！　ほら、入れちまいな」
「アリサたん、お尻を犯す準備ちまちょうねー」

――ちゅうううううっっーーー。

「きゃあああああっっーーー！」
「うおっっ！　いきなりマンコ食いしめやがった！」
「ねー、結構すごいっしょ」
「冷たいぃぃ……何……？」
「浣腸ーだよ。アリサたん、初めてかなー？」
「かんちょう……？　うそ……抜いて！　抜いてぇ！」
「だめだよー。お浣腸しとかないとアナルファック楽しめないでしょー。大丈夫、もう終わるから」
「ううう……気持ち悪いよぅ……」

アナル……お尻を、どうするというのだろう？

でも、それを考えることはできない。
凄いいやらしい気分と、お浣腸の不快感。
終わって程なく私のお腹がゴロゴロいい始める。

「アリサたん、しばらく我慢だよー」
「む、むりぃ……出ちゃうぅ……」
「途中でおもらししたらお仕置きだよ。……この家畜用の浣腸器でアリサちゃんのかわいいお腹には何リットルはいるか実験してあげるね」
「い……いやぁ……あぁぁ……いたぃよお……」
「お尻に力入れて我慢するんだよ。……そうだなぁ……一回射精して洗ってもらったら出させてあげるね」
「ひ……そんな……」
「じゃあ、がんばらねぇとな！」
「いやあああっっ！　う、動かないでぇーーー！　痛い痛いよぅっっ！　うあああぁぁぁーーー」

男は容赦なく腰を振り始める。
その度にお尻から浣腸液がもれそうになり、私は必死でこらえた。

「あんっっ！　あんっっ！」
「おおっっ！　すっげーしまるぜ！　こりゃいいわ！　浣腸いいもんだな！」
「でしょー？　でも、初めてで浣腸ハメは少し無理があったかな？」
「くうううっっ！　漏れるっっ！　漏れますぅー」
「ちっ。やっぱ無理か。ありさたん、栓してあげる」
「なっ……ううううううんんーーー！」

私のお尻に指が！指が！い、いやあああーーー！

「コレで漏れる心配はないから。思いっきり動いちゃって平気ー」
「お、いい感じだ！」
「きゃあああんん！　あんっっ！　あんっっ！
き、キツイよぅ……！　お尻ぃ、お尻ぃ、か、かき回さないでぇ……！」
「こうしたほうがよりキレイになるって」
「うあああああああんっっ！　アリサ、こわれちゃうよぅーーー！　あん！　あん！　おまんことお尻キツイいいいーーー！」
「おっと、指を銜えないと……ちょっとお漏らししてるよ……はしたねぇアマだな！」

——ぐりぃいいいいい！

「ぎゃあああ！　指、もう無理ですぅーーー！　ああああああああっっ！」
「お前がしっかり我慢できねえから二本入れてやったんじゃねえか！　ほらよ！」

——ぐい！　ぐりりりっっ！

「動かさないでぇーー！　もう無理！　キツイいいいいい！」
「めちゃめちゃにヤラシイ液出して何が無理だ！」
「よし！　そろそろ出すぞ……うおっ！　出るっっ！」

ドクンと男の物が私の中で一際大きく膨れ上がる。
そして——どぶっっ！　どぶうううううううう……！
「あがあああああああああぁぁぁぁぁぁぁ！　せーえき！
せーえき出てるっっ！　アリサのおまんこ、せーえき出されてるぅうううううう！」
「くっっ！　嬉しいだろっ！　お前の淫乱まんこ、どろっどろの精子で洗ってやってるぜ！　おうっ！」
「ああああぁぁぁ——！　あちゅいーーー！　せーえきあちゅいよぉおおおおっっーーーー！」
「じゃあ、こっちも解禁ね。抜くよ」
「っっ！　待ってぇ！　おと、おトイレにっっ！」
「だめーーーだよ。アリサたん」
「ああああああああっっうううううううう！！　出るぅうううううううううっっ！」

初めての膣内射精のショックと初めての人前での排便に私の意識はゆっくりと遠のいていった。
……。
……。
……。
『……アリサ……アリサ』
パパ……？
「パパぁ……私、もう……」
『……アリサ……』
「キツイよぅ……」
『ごめんな、アリサ。俺たちのために』
優しいパパ……。
……そうだ……パパをママを助けなきゃ。
私は現実に戻ろうと抗う。
そうすると——
「——アリサたんー！　もしもーし」

ピシャピシャと誰かが頬を叩く
ゆっくり目を開けるとそこは地下室でやはり男達が私を取り囲んでいた。
「良かった。気がついたんだ」
「うぅ……」
「これから肛門ハメなのに気絶したままじゃつまんないからさぁ……」
ギャハハハ……。
地下室に響く下品な声。
でも……。
「ほら、早く四つん這いになって。早くしないとアラガミ化が進むよー？」
「もっともーっと洗わねぇとな！」
……そうだ……。もっともっと洗ってもらわなきゃ……。
「はいぃ……」
「素直じゃん。可愛がってやるよ」
「お願いしますぅ……アリサ、アリサの肛門をせーえきでキレイにして下さい……っっ！」
「おねだりも満点っと！　そいっっ！」
「ぎゃあああああっっ！　痛い、いたいーーー！」
「だいじょーぶ！　アリサぐらいの淫乱ならすぐ良くなるって！」
「おい！　ケツだけじゃねぇぞ！　後がつかえてんだ！　早くまたがれ！」
「うっわ！　どっちが鬼畜よ？　ほら、アリサ、腰掛けろ！」
「だめーーー！　無理……ぃ……いやあああ！」

――ぐじゅうううううっっ！

「おおおおおおぉーーーー！　入ってるぅうううう！」
「何がだよ！」
「アリサのオマンコとアナルうぅっっーー！　男の人のおちんちんがぁぁーーー！　ぐうううううう！」
「たくさんたくさん！洗ってもらうんだろうっ！」
「はいいいいいいーーー！　アリサぁ、たくさんおまんこと肛門に中出ししてもらいますぅーーー！」
「変態ゴッドイーターが！」
「はいぃいいいっっ！　せーえきまみれにしてもらわないとぉ……アリサぁ……アラガミになるからぁ……！」
「じゃあ、いっぱいしないとな！」
「あえええええーーー！　おおおぉおおっーー！　洗ってぇーー！　アリサのいやらしいところキレイキレイしてくだしゃいーーー！」
「よし！　出すぞ！」
「あがあああああああ！　いっぱいいいいいい！　熱いのお尻にぃ！　あうっっ！　オマンコも洗ってもらってるぅうううーーー！　おおおおおおぉおおお！」

――どびゅうううううううっっ！

熱い熱い男の精液。
全身にかかっていく精液。
……また……洗ってもらえた。
アラガミ精液……薄れてるといいなぁ……。
ねぇ、パパ……待っててね。アリサ、すぐ行くから……。

「よし！　次だ！　やっと俺様のばんだぜー！」
「はいいぃぃ……存分にアリサのいらやしいところ洗ってくださいぃぃぃ……くうううううっっ！」「ヌルヌルまんこさいこーだな！」
「ふぐうううううう！！　おちんぽ！　おちんぽきたぁーーー！　あうううんんん！」
「ほれ、ケツもだ」
「あがあああああああああああっっ！　お尻いぃーーーー！」

男達は代わる代わる私を犯す。何回も何回も。
おまんこもお尻も精液まみれになってきていて……もう何回洗われたもわからない。
でも、まだ足りない。もっともっと洗ってもらうの。ね、パパ。

「は……は……う……」
「お嬢ちゃん、伸びてる場合じゃねぇよ？　まだまだこれからだ。ほら、マンコひろげてねだれよ」
「は、ひ……アリサのマンコ……あらッえくだしゃあえええええええっっ！」
「気持ちよさよーなツラしやがって」
「初めてで輪姦されてんのに大した淫乱だよ」
「やーっぱ報告書のパパやママ……偉大だぜ」
「違いねぇ！」

――それから、二時間。
私の中のアラガミ精液の洗浄は続いていた。
私の中、もうだいぶ、きれいになってる。
だけど……まだ、足りない。
もっともっときれいにしないと……パパにママに会えない。パパとママが帰ってこない。だから、もっともっと、もっともっと、もっともっと……

「はくぅぅっ、ふぅぅっ！　うぐうううっっ！　い、いくうううう！」
「またイクのかよ！　お嬢さんは男をイカせなきゃなのに……しょうがねぇな！」
「ごめんなしゃいいーーーーー！　アリサ、淫乱らからっっ、我慢でき……い、いぐぅぅぅぅうーーーー！」
「しゃーねぇなあ！」
「あああああっっーーー！　また来るっっ！　と、飛んじゃうよぅぅぅうううううーーーー！　怖い、こわいよーーーー！　助けてぇ！」
「お、連続イキだぜ！」
「おごおおおおっっーーー！　パパぁ！　ママぁ……いぐうううううううっっっ！」

身体が……ガクガクする。
もう、ダメ……私ぃ、死んじゃうぅ……。

「……ちっ……白目ムキやがった……」
「そろそろ……支部長達およびして一旦報告すっかー」
「おう」

○

「――そろそろ頃合いか」
「はい。コレでこの子の理想を入れてやっておしまいです。誰が理想かはわかりませんが……愛しい人との性交に精神は安定するでしょう」
「この子の場合は決まってるだろうな」
「また不安定さが認められれば、今回と同じことを繰り返せば問題ないでしょう」

「夢の中だけの幸せか……よし、やれ」

◆　◇　◆

ここは……どこ？
なんで……私……ベッドにいるの……？？
洗浄……は？

「アリサ……」
「パパ！？」
「よく頑張ったね……可愛いアリサ」
「……パパぁ……」

優しい、優しいパパの声。
何度も何度も夢に見た。
でもラストは必ず食べられちゃうの。
必ず。
夢とわかって居てもそれは悲しくて……私何度も泣いた。
パパ……パパ……。

「私もママもお前も事が大好きだったよ……」
「パパぁ！」

きゅっと抱きしめられると、懐かしいパパの匂いが私を包んだ。
ああ……パパ！　パパ！　パパ！
「パパがご褒美をあげるよ、アリサ」
「……うんっ」

何故か、パパのプレゼントが私にはわかった。
私はスカートを捲りあげ、パパにおねだりをする。

「パパぁ……アリサのおまんこ……愛して下さいぃぃ……」
「可愛いね、アリサ」
「うんっ！」

パパは優しく私の身体を抱きしめる。
でも、パパのお指、太いお指は私のおっぱいばかりを弄ってくる。それだけじゃない。敏感な乳首をコリコリもしてくる。

「はあぁぁっっ！　パパぁ……お胸ばっかりぃ……苛めないでぇ……っっ！」
「どうして？　乳首をコネコネするとアリサのおまんことろとろになるじゃない」
「でもぉ……せ、せつないよぉ……！」
「かわいい、アリサ」
「あんんんーーーー！」

パパ、パパ……愛しいパパ。
大好きな大好きなパパ。
パパ以上の男の人なんていない。
大好き、パパ。

「あんっっ！　パパぁ！　クリちゃん舐めちゃきたないよぅーーーー！　きゅうぅぅぅっっ！」
「アリサの体で汚いところなんて一つも無いよ、ほら」
「きゃあああああんっっ！　ちゅうちゅうだめぇーーーー！　アリサ、それ、弱いんだよぉーーーー！　だめぇーーーー！」
「ふふ……勃起して……ピクピクしてるね……。クリちゃんで上手にイケたらパパのおちんちんを入れて上げるよ」
「ほっ、本当……？？　パパぁ……本当……？　あんん！」
「できるかな……？」
「か、簡単だようっっ！　ほらぁ……く、、イクぅ……！　クリちゃんイクぅーーーーー！」
「あむっっ！　可愛いクリイキだね……でも、こうすると……」
「きゃあああああっっ！　だめえ！　イッたばかりのクリちゃん！　しごかないでぇーーーーー！　ひぅんっっ！　に、にゃあああああぁんーーーー！」
「可愛いアリサの連続絶頂……パパに見せてごらん」
「にゃあああーーーーー！　またクるっっ！　クリちゃんっっ！　い、いぐうううううう！！」

——ぴしゃあああああああっっ！　しゃあああああああああああ……

私のあそこから熱いモノが噴き出しちゃう。
パパの責めがきついから……こんな恥ずかしいところを見せちゃうっ。

「きゃあああんっっ！　お、おもらひぃ……おもらししちゃったよう……ぱぱぁ……っっ！　み、みないでぇ……お願いぃぃ……」
「大丈夫だよ、アリサ。パパはアリサのお漏らしなんかさんざん見てたから……でも、大きくなったアリサのお漏らしは素晴らしいね……ほら……アリサの連続イキとおしっこ漏らしのせいで、パパ、こんなになったよ……」
「ぱぱぁ……」
「……どうしたらいいか、わかるかい？」
「はいぃ……」

私はパパに向かってゆっくりと足を開いて、自分の痴部を指でこじ開ける。
ぱぱぁ……アリサのおまんこ……見てぇ……
「アリサのおまんこにパパのおちんちんを……入れて下さい……」
「良くできました。僕の可愛いアリサ」
「あっっ！　くぅうううっっーーー！」
「入っていくよ……」
「パパのぉ！　パパのお！　おちんちんーーー！」
「アリサはいやらしい……イイコだ」
「はうううんっっ！　お、おっきいよぅっっ！」
「くっ……アリサのおまんこで……パパを食べてっっ！」
「あんっっ！　おちんちんっっ！　パパのおちんちん素敵ぃーーー！」
「アリサのオマンコも最高だっっ！　くっっ！」
「んああっっーーー！　きもひぃいいようっっ！　おまんこズコズコされるの、きもちいいのぉーーー！」
「アリサは淫乱だぁっっ！　おおっっ！　パパのチンポも食いちぎられそうだ！」
「んひいいいいっっーーー！　あたって……あたってるのっっ！　アリサの気持ちイイ奥にぃーーー！」
今までで一番近くにパパを感じる。
パパ、パパ。
私、ずっと……こうしたかった。
パパに抱きしめて欲しかった。
急にいなくなるんだもん。
アリサ、寂しくて……ずっと泣いてたの……。
パパ、パパ。
だから、パパの証を私に刻んで。
私はパパとママの敵を討つ。
必ず、討つ。
アラガミなんかに負けないから……。
アラガミからパパとママを救い出してあげる。
だから、パパ……今はアリサを……愛して！
それで、アリサ、強くなれるからっ！
「あああああーーーーー！　イクっ！　もうダメぇっっ！　くうううううっっーーー！」
「パパもっ……アリサの中に……出すよっ」
「うん！　うん！　パパ！　お願いぃーー！　たくさんたくさんパパの精液出してぇーーー！」
「くっ！　出るっっ！」
——どぴゅうううううう！　ぴゅる！　ぶぶぶぶっっ！
「きゃあああああんーーーー！　熱いぉっっ！　パパのせーえき、ドブドブってアリサの中キてるぅう！　きもちいぃようっっ！　し、しあわせぇーーー！」
「アリサ！　アリサ！」
「きゃうんんんっっ！　ぱぱのぉせーえき入れてもらってぇ……アリサまたきちゃうっっ！　パパぁ！」
「愛してるよ、アリサ」
「アリサもだよぉーーー！　パパぁ！　きゃうううううううううううっっ！　い、イグぅうううううううううううーーー！」
私はイッた。
パパの前だっていうのに、こんなに恥ずかしいことを見せている。
でも、とても気持ちいい。
現実感の無いふわふわした気分。これ、イッたからかな？
「アリサ……」
「……ママ？　ママなの？」
「そうよ。ママよ」
ふわふわの正体はママだった。
ママの優しい体の匂い。柔らかい体の感触。
私はママの膝の上に頭を置いていた。
優しいママの手が私の神を撫でる。
「ママが大好きな人と愛し合えてよかったね」
「ママ……」
「ママとパパはこうやって愛し合ってアリサを生んだの。だからアリサはもっともっと強くならなくちゃね」
「ママ……ありがとう」
「いいのよ。ママはパパのこと好きだけど、アリサのことはもっともっと大好きだからね」
「うんっ！　うんっ！　ママっ！　大好きぃっ！」
ママは優しく私の身体を撫でる。
どんどん……どんどん……身体が綺麗になっていく。
アラガミに犯された部分がきっと綺麗になっていく。
パパの精液で洗われて、ママの手で拭かれて、私、綺麗になる……
「パパ……ママ……大好き……」
幸せな幸せな甘い時間。

私は、この事が夢だってどこかで気付いてる。
でも夢でもいい。
パパにまた会えた。
パパと愛し合えた。
ママにまた会えた。
ママに優しくされた。
アリサ……幸せ。
……パパぁ……ママぁ。

◆　◇　◆

それから――。
私は一週間の休養を経て第一部隊に復帰した。
復帰祝いと称してコウタははしゃぎ、サクヤさんは我がことのように喜んでくれた。
他のアナグラの神器使いたちも、私の復帰を歓迎してくれた。
……こういうの、本当は慣れていない。
ちょっとだけ自分のやり方とは反している。
ただ、私と同じ新型の人だけは、私のこと分かってくれているみたいで……ちょっと距離を置いてくれている。その心遣いが嬉しい。
……もっと素直な方がいいのかも知れない。

「アリサ、すっかり元気になったわね」
「一時はどうなるかと心配したぜー！」
「ご迷惑をお掛けしました」
「水くさい事いいっこナシ！　これからも一緒に頑張ろうぜ！」
「……はい」
「おやあ……めずらしく素直じゃん！」
「……病み上がりをからかうなんて……どんびきです……」
「あはははははっっ！　もうすっかりいつものアリサね！」
「もうっ！　サクヤさんまで！」

……いや、ダメだ。
私は、パパとママの仇を討つ。
絶対に……アラガミを許さない。
私の前からアラガミを……ああ……パパ……ママ……。
まだ、汚れてる。
私の中が、心の中が、体の中が……汚れてる。

○

「――ふむ、うまくいったようだな」
「アナグラの中、部屋での監視でも特に問題はありません」
「東極支部の唯二の新型を失う訳には行かないからな。……それにこの娘は……」
「はい、準備は万全です」
「うむ、後は時を待つだけか」
「まぁ……あとは……付いてしまったあのクセを……ですなぁ……」
「……そこは特には問題になるまい。アナグラには若い男なぞ沢山いる。なんなら記憶操作して外の人間を連れてくれば良い」
「まあ、そうしますか」

部屋は散らかったままだった。
当たり前だ。
第一部隊は、一線で戦う部隊。
だから、私の部屋が片付くのは一週間に一度、あるか無いか。
でも、そうすると私の部屋同様に私の体が汚れているような気分になる。
散らかっている、汚れている、私の部屋。
片付けはできないから、ただ物を寄せるだけ。
でも、それじゃあ私の体は綺麗にならない。
「いや……アラガミになるのは……いや……汚いのは、いや……パパ……ママ……私、きれいになる……またきれいになって、パパとママに会うの……だから、助けて、パパ、ママ」

こんな日は足が向く。
あの地下室に。
今日も向いてしまう……。
私の願いはたった一つ。
精液でキレイに洗浄されて……綺麗になってパパに会いたい。ママに会いたい。
私の中のアラガミをドロドロの精液で洗い流して欲しい。
それだけ、それだけ。
「……今日も私の中のアラガミを皆さんの精液で洗って下さい……」

男達は嬉しそうに私を受け入れる。
そして、私もまた嬉しそうに彼らを受け入れる。
だって、こうするとパパとママに会えるんだもん。
でも……私の中のアラガミは、いつ消えるんだろう。
……パパ、ママ。
アリサに力を貸して。

【END】

あとがき☆

皆様、お久しぶりです！！　またははじめまして！
グランドクルスの八叉かがみです！！！
この度は本誌をお手に取って頂きましてありがとうございます。

今回皆様にお届けしますのは、私も凄いハマッてますのゴッド〇ーター本です☆
私も武藤先生から勧めて頂いたんですが、始めた途端、その世界観とストーリーにぶん殴られ……。
睡眠時間を削ってプレイしてます。……おかげで……肌荒れが……ひどくなりますた。ガックシ。

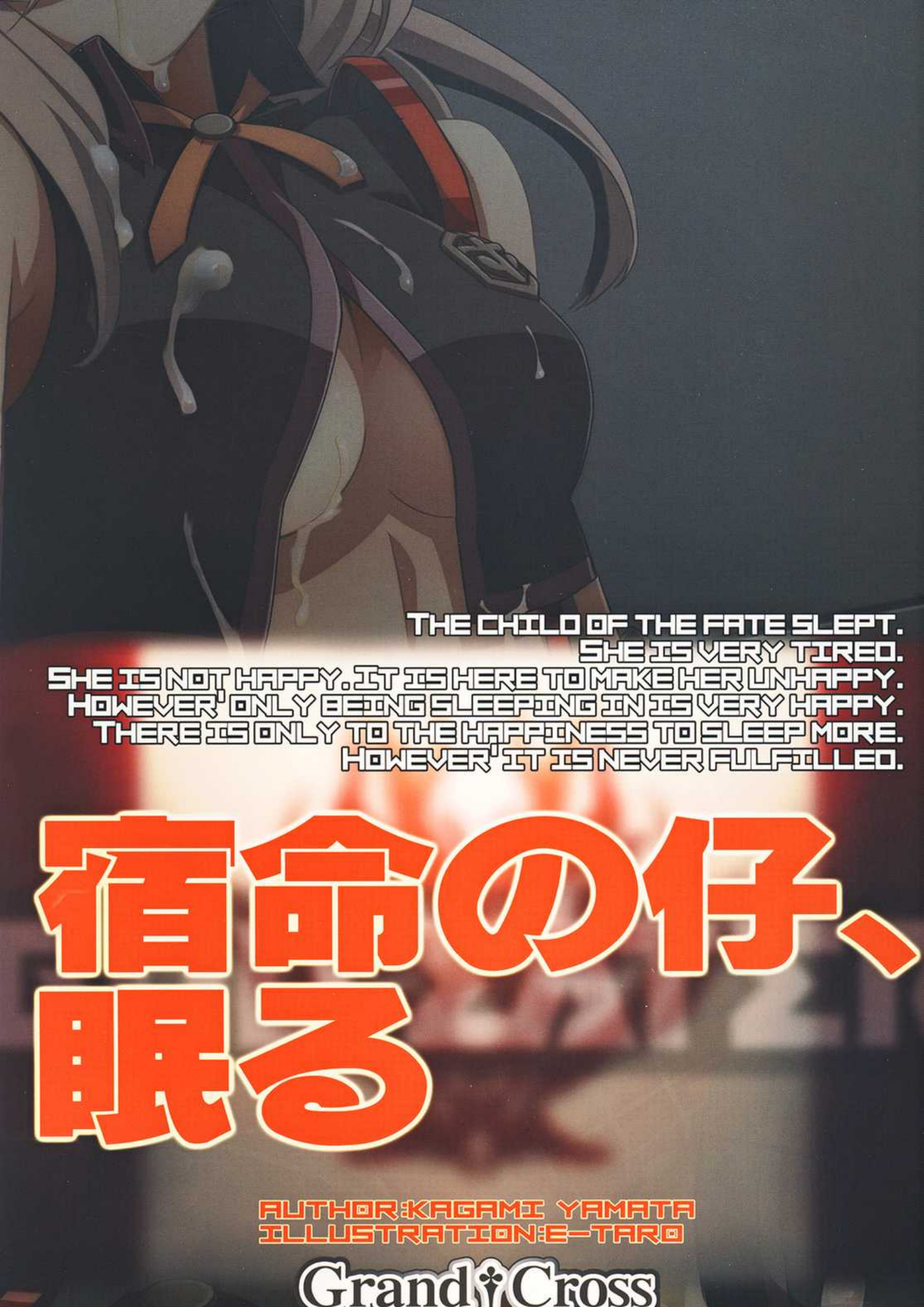
そんな大好きスギのゴッドイー〇ーからアリサちゃんに頑張ってもらいました！！
アリサちゃん可愛くてダイスキー！！
ちなみに男の子で一番はそーま！！
……次はソーマ本かしら……っっwww

ではでは、最後になりますがもう一度。
お手に取って頂きましてありがとうございました！
また次回も皆様とお会いできますよう、精進致します。
ありがとうございました☆

■　おくづけ　■

発行：GRANDCROSS
著者：えーたろー＆八叉かがみ
http://grand-cross.web2.jp/

2010年4月29日発行
印刷：BRO′S


THE CHILD OF THE FATE SLEPT.
SHE IS VERY TIRED.
SHE IS NOT HAPPY. IT IS HERE TO MAKE HER UNHAPPY.
HOWEVER' ONLY BEING SLEEPING IN IS VERY HAPPY.
THERE IS ONLY TO THE HAPPINESS TO SLEEP MORE.
HOWEVER' IT IS NEVER FULFILLED.
宿命の仔、眠る
AUTHOR:KAGAMI YAMATA
ILLUSTRATION:E-TARO
Grand Cross